

河川・流域（13）（3-B-10-4～3-B-11-4）

大会三日目に開催されたセッション[河川・流域(13)]では5件の口頭発表が行われた。

3-B-10-4「森林表層土壌の溶存有機炭素に対する湿潤・乾燥条件の影響」では、試験流域の斜面土壌、河畔湿地および河川水中の溶存有機炭素(DOC)の観測結果に基づき、DOCの発生予測式のパラメータを決定し、この式からDOC発生量の予測が可能であることが示された。

3-B-11-1「源頭部森林流域における河川水の溶存有機炭素に与える河畔湿地の影響」では、流域内の斜面土壌および河畔湿地中の土壌水中のDOC濃度と渓流水中のDOC濃度の関係を調べた結果、河畔近くの湿地土壌が渓流のDOC濃度を決定していることが報告された。

3-B-11-2「源流域河川中のバイオフィームに関する基礎的研究」では、異なる材質の5つの付着基質を河床に設置し、一定期間後に付着したバイオフィーム(付着生物膜)を調べた結果、木製タイルではバイオフィーム中の有機物量が最も大きかったが、クロロフィルa量は天然石と流木の基質での付着量が大きく、基質によって生物相が異なることが示唆されることが報告された。

3-B-11-3「熱帯泥炭地河川の水質特性 - 中央カリマンタン・セバンガウ川流域 - 」では、森林伐採や農地や住宅地などの土地開発が河川水質に及ぼす影響を調べた結果、流域住宅地から流出する河川が他の土地利用の河川に比べて人為起源の物質の濃度が高いことが示され、生活排水によって河川の水質低下を招いていることが報告された。

3-B-11-4「世界遺産熊野古道(伊勢路)の水質調査」では、三重県の海岸線沿いの11河川の水質を調査した結果、汚濁物質の少ない良好な水質であり、重金属はすべて検出限界以下であるが、流域に分布する酸性岩類の影響でpHがやや低い特徴があり、溶存成分にも地質や海の影響があることが報告された。

(森林総合研究所 立地環境研究領域 金子 真司)